

□海外文献紹介□

小児と若年成人における Barrett 食道

Barrett's esophagus in children and young adults—Frequent association with mental retardation: *Snyder J D, et al*(*Dig Dis Sci* 35: 1185-1189, 1990)

若年者の Barrett 食道に関する疫学データはほとんどない。著者らは 1982-1986 年の間にボストンの小児病院で内視鏡的食道生検が施行された症例 (1,173 例に対する 1,423 件の生検) を対象に、若年者の Barrett 食道について検討した。検討対象のうち食道炎の所見は 397 例に認められ、10 例が Barrett 上皮と診断されていた。これは全生検例の 0.9%、食道炎症例の 2.5% であった。Bar-

rett 上皮 10 例のうち specialized columnar epithelium は 7 例にみられた。Barrett 上皮を有した症例の平均年齢は 19 ± 7.9 (3.7~27) 歳、食道生検例全例の平均年齢は 8.7 ± 6.7 (4~31) 歳であった。Barrett 食道症例の 80% は男性であり、検討対象全例の 54% に比し、いっそう男性有意の度合いが強かった。次に Barrett 食道症例 10 例と 1984-1985 年の間に施行された食道生検例 541 例を対象に、Barrett 食道発生に関係しうろ因子を検討した結果、知恵遅れが Barrett 食道症例では 70% にみられ、食道生検全例での 15% に比し有意に頻度が高かった。このことは今までに記載のない知見であった。また、知恵遅れは食道炎の 19% にみられ、有意差はないものの生検

正常例の 14% よりも高かった。人種、先行する狭窄、逆流性食道炎手術歴などと Barrett 食道には有意な関連はなかった。

【訳者コメント】 Barrett 食道はその発生までに、成人例では通常 10 年以上の逆流性食道炎歴が必要とされている。本論文では最短 3 年で発生しており、本当に小児例では逆流症状期間が短くても Barrett 食道が発生するのか興味がある。精薄者は介助者に症状をはっきり訴えることができないことが多く、食道炎が遷延する。また、四肢麻痺を有する症例では体位が逆流を起こしやすい。障害児施設では本症発生に注意する必要があるようだ。

(愛知県がんセンター内視鏡部

伊藤克昭 抄)